

京都大学「東日本大震災関連プロジェクト」で発表

金子 昭

京都大学こころの未来研究センター主催による「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」の研究会が、1月24日に同大学百周年時計台記念館を会場に開催された。この研究会は昨年7月に行われた同プロジェクトの公開シンポジウム「災害と宗教と『心のケア』—東日本大震災 現場からの報告と討議」に続く2回目のもので、今回のテーマは「災害時における宗教的ケアと宗教的世直し思想について」である。今回は、研究者や宗教関係者による比較的少人数（30数名）の研究集会として開かれた。

鎌田東二（京都大学）の司会進行の下、次のような発表とコメントが行われた。

鈴木岩弓（東北大学）「心の相談室の活動と東北の宗教文化」
コメント：稲場圭信（大阪大学） 井上ウィマラ（高野山大学）

金子 昭（天理大学）「宗教的世直し思想について」
コメント：島蘭 進（東京大学）

鈴木氏は、現在、東北大学宗教学研究室が事務局となっている「心の相談室」の成り立ちやその活動を紹介し、僧侶による「カフェ・デ・モンク」など地域の「お茶っ子飲み」文化を生かした実際の現場での事例報告を行った。宗教者の特質は「あの世の世界を語るメッセンジャー」であり、その心のケアはスピリチュアルな側面からのものであるという。そして鈴木氏は、宗教者によるグリーンケアを根付かせることや、被災地東北に「臨床宗教師」養成機関を作ることなどの可能性について問題提起を行った。

私（金子）は、宗教者の活動が震災後1年近くを経過して、一種の草の根的な「世直し」的方向性にも向かっていることを指摘し、田中正造の鉅毒反対運動などを紹介しながら、その「世直し」の性格付けについて検討を加えた。私は、宗教者が宗教者たるゆえんは「肩書き」ではなく、「生き様」にあると考えている。そして、今、求められる宗教者のあり方とは、民衆の中に分け入って活動する聖のような存在であり、また在野中の在野たる宗教者による「世直し」も、民衆力による「谷底せりあげ」、及び文明の転換を目指す運動へとつながるべきものだと論じた。

コメントや質疑応答においては、伝統宗教と新宗教では活動にやはり相違が出ている、宗教も民俗化しないと現場では通用しないのではないか、民衆宗教と民俗宗教とは実際どのような関係を持ちうるだろうか等々、多くの論点が出され、最後の総合討議では発表者やフロアも交えて活発な議論のやりとりが行われた。

第245回研究報告会

台湾原住民とキリスト教の沿革

表記研究報告会が1月25日、533演習室を会場に開催された。発表者はイギリスのブリストル大学博士課程で文化人類学を専攻する黄約伯氏（原住民名はタカアママ・ヨブ氏）。黄氏

は台北に一番近いタイヤル族の部落・烏来の出身で、父祖以来のキリスト教長老派教会の信徒である。現在、構想中の博士論文テーマは天理教の海外伝道とのこと。

なお、発表は中国語で行われ、通訳は本学の中純子准教授と山本和行講師が務めた。今回は、一時帰国中の三濱善朗・台湾伝道庁長はじめ教内の台湾関係者・研究者の参加もあり、盛況な研究会となった。

黄氏の発表内容は以下の通りである。

現在、台湾原住民は14部族に分類されているが、タイヤル族（約8万人）はアミ族（約19万人）に次いで人口が多い部族である。全般的に原住民におけるキリスト教信者の比率は非常に高く、タイヤル族の場合、カトリックとプロテスタントを含めて約84%がキリスト教を信仰している。

台湾にキリスト教が入った時期は古く、17世紀の初頭に南部はオランダ人によりプロテスタントが、北部ではスペイン人によりカトリックが移入されている。ただその後、鄭成功による禁教令が出たりして、初期のキリスト教は一時期途絶えてしまった。清朝時代、そして日本統治時代になって再び布教伝道が活発になり、とくに日本統治時代には医療伝道が行われるようになった。第二次世界大戦後は、アメリカ経由でキリスト教が盛んな布教活動を展開し、この時期に多くの原住民が入信した。

長老派教会の場合、戦後に教勢が進展した時期には、アメリカとの友好関係の下、積極的な原住民伝道が展開し、原住民の習慣として集団で信仰に入るケースが多く、また社会貢献活動や救済活動も活発に行われた。しかし1970年代になって台湾経済が発展するにつれ、原住民が故郷を離れたり、またその故郷である「山地」も生活が豊かになって「平地化」したり、伝道者の素質の問題や異なる教派の参入などもあって、信徒の信仰がいささか不安定になる傾向が見られるようになった。その結果、その教勢は現在伸び悩んでいるという。

烏来地区の長老派教会は1945年に初めて福音を伝えた。最初は個人礼拝堂から村落に布教センターが出来て、その後、家庭集會も行われるようになった。現在、4階建ての高さの立派な教会が建てられているが、これは1995年に新たに建設されたものである。信徒数は陪餐会員（主の愛餐に与れる会員）が205名、未陪餐会員が124名、その土地にいない会員が77名である。

もともと烏来のタイヤル族はutux信仰（一種のアニミズム信仰）だったが、それがキリスト教に改宗することによって上帝（天の神）への信仰へと変化した。この改宗にあたっては、社会人類学的視点からは、植民地意識からの観点、改宗前の神信仰の一種の読み替え（翻訳）があったとする観点、信仰が生活全般に及んできたからという観点、政治経済的影響が強いという観点などが挙げられるという。

その後の質疑応答では、戦後の原住民をめぐる環境の変化とキリスト教の伝道の関係、また最初期のキリスト教伝道のその後について、また統計数字の不明点や日本語文献の必要性の問題など、多岐にわたる論点が提出された。今回の発表はキリスト教を例に取り上げたものだったが、天理教の異文化伝道を考える上でも、多くの示唆を与える内容であったと思う。（金子 昭記）

セミナー「震災と祈り—立正安国とは何か」に参加

深谷忠一

2月7日に、日蓮宗宗務院（東京都大田区池上）において、第22回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナーが「震災と祈り—立正安国とは何か」をテーマに開かれた。

これは、日蓮宗教師・寺族・檀信徒を対象に、東日本大震災をいかに受け止め、それを檀信徒にどのように伝えるかを考えることを通じて、現代の立正安国とは何かを考える機会にするというもので、今回初めて他宗の付置研究所懇話会の会員にも参加の案内がなされ、当研究所からも呼びかけに応じて所長が参加した。

当日は、80名程度収容の会場に倍以上の主若手・中堅と見られる僧侶が参集した中で、3名の講師による①日本佛教の立場から、②佛教学の立場から、③日蓮教学の立場からの「震災と立正安国」という発題がなされ、その後各発題者によるパネルディスカッションがなされたが、内容的には、現代における「立正安国論」とは何かに確たる答えを出すのに宗団も苦勞している様子が伺えた。

(from page 13)

The ideals of normalization, which first appeared as a law in Denmark in 1953, are irreplaceable elements of today's welfare for people with disabilities. Also, the United Nations' designation of 1981 as the International Year of Disabled Persons called attention to the existence of the disabled, who had often been rendered invisible in society; it also called for a society in which the disabled could participate fully and equally in society.

Since the International Year of Disabled Persons, the ideals of normalization have become the normative principle for the world's welfare for the disabled.

In this article, I will examine the activities of welfare for the disabled based on the principles of normalization, and reflect upon how we can envision human existence in our contemporary world and the direction that we should take in the future for welfare for the disabled.

Mari Namba — Tenri and Sports (Final) Tenri Sports Symposium [12]

As a summary to the symposium, Chuichi Fukaya, the head of the Oyasato Institute for the Study of Religion, commented, "I also remember seeing access ramps on various buildings so that those with disabilities can move about on their free will. In comparison to those days, I believe that Japan is slowly coming closer to such a state. Today, we have had various panelists speak from their individual perspectives. I do think that we need to resolve more issues in panels such as this and continue to tackle the mountain of issues that still remain.

All of us put into practice a way of life in which we can fully savor the joy of being given life in this world, based on Oyasama's teaching that we are 'all brothers and sisters.' Those with disabilities and those without are given their circumstances to seek a world of Joyous Life from their individual standpoint. Therefore, I hope to put into practice the teachings of 'all brothers and sisters' so that we achieve a world of Joyous Life from the manifold of conditions that we all bring."

連載執筆のねらいと執筆者の紹介

ノーマライゼーションへの道程

障害のある人（以下、障害者）はいかなる時代にも、また世界のすべての国に、あらゆる社会階層に存在する。そして、その障害者を取り巻く社会環境も一様ではない。

1953年にデンマークの法律として産声をあげたノーマライゼーションの理念は、いまや世界の障害者福祉のうえで欠かすことのできない一つの考え方である。また、1981年に国連が定めた「国際障害者年」は不可視化されることの多い障害者の存在を社会に知らしめ、障害者の社会への完全参加と平等を具現化する社会づくりを提唱した。

その国際障害者年以降、ノーマライゼーションの思想は世界の障害者福祉の普遍的原理として普及している。

本稿ではそのノーマライゼーションの理念に基づく障害者福祉の動きを様々な角度から検証し、それを通じて今の時代に生きる我々がどのような人間観を持ち、また今後の障害者福祉の目指すべき方向性とは何かについて考えていきたい。

八木三郎（やぎ さぶろう）

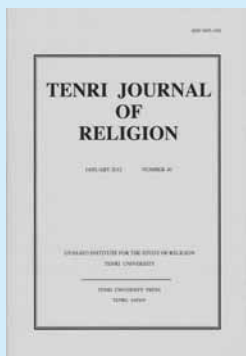
日本福祉大学大学院：社会福祉学研究科修士課程修了。

2010年4月より現職。1983年ダスキン障害者リーダー育成海外留学派遣事業3期生にてアメリカ留学。2002年内閣府青年社会活動コアリーダー育成プログラム1期生にてデンマーク派遣。現在、奈良県障害者施策推進協議会会長ほか各種審議会委員を務める。

研究課題：ユニバーサル社会における障害当事者性の研究。

新刊案内

このたび、『Tenri Journal of Religion No.40』を発行しました。本書を希望される方は、おやさと研究所事務室へお申し出ください。



CONTENTS

Yūichi SAWAI : The Place and Content of "the Truth of the Teachings" in *The Doctrine of Tenrikyo*.....1

Mikio YASUI : A Study on the Mind of Saving Others: An Outline of the Frame of Such a Mind.....19

Yukie IHASHI : A Divine Direction Phrase "No Distinction Between Men and Women" and Its Context.....37

Ikūo HIGASHIBABA: The Divine Word and the Divine Model: Beyond Otherness.....53

Kensaburō MATSUDA : On the Truth of "A Thing Lent, A Thing Borrowed" — Tracing Prior Research—65

Ichirō SŌDA : Regions with High Density of Tenrikyo Churches.....83

Midori HORIUCHI : Reexamination of the Family from a Standpoint of Tenrikyo Teachings.....99

Yoshitsugu SAWAI : Religious Perspectives of Nature in East Asian Cultures113

天理大学 おやさと研究所 平成24年度公開教学講座

信仰に生きる 『逸話篇』に学ぶ(1)

教祖のご在世当時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰の世界の一端を明らかにしたいと思います。

本講座は、平成24年および平成25年の2カ年間、4月から11月（7月を除く）の毎月25日、午後1時から2時45分にかけて、道友社6階ホールで開催を予定しています。

平成24年度については、以下の内容で実施いたします。

4月25日(水)	7「真心の御供」	深谷忠一
5月25日(金)	25「七十五日の断食」	堀内みどり
6月25日(月)	10「えらい遠廻わりをして」	澤井義次
8月25日(土)	2「お言葉のある毎に」	幡鎌一弘
9月25日(火)	11「神が引き寄せた」	八木三郎
10月25日(木)	31「天の定規」	澤井義則
11月25日(日)	22「おふでさき御執筆」	安井幹夫

場所：天理教道友社6階ホール

時間：13：00～14：45

*お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローバル天理

第13巻 第3号 (通巻147号)

2012(平成24)年3月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan